散策を楽しむ美術館
世界遺産と文化復興のシンボルと

ル・コルビュジエの命名に由来する「19世紀ホール」。美術館の核となる部屋だ
東京都台東区上野公園、国立西洋美術館

新型コロナウイルスの流行に悩まされた3年余を経て5月、同ウイルスの感染症法上の位置づけが5類に変わり、街中にも人が戻ってきた。これまで多くの人出や密集を避けて、芸術に親しむ機会が減っていたという方も多いのではないだろうか。東京、兵庫ともに美術館は多く、さまざまな企画展が展開されているが、そもそも展覧会を催す器そのものが魅力的な場所であることが多い。今回はル・コルビュジエの設計で世界遺産に登録され、松方コレクションを基礎とする作品群を持つ国立西洋美術館（東京都台東区）と、阪神・淡路大震災後に文化復興のシンボルとして安藤忠雄氏の設計でつくられた兵庫県立美術館（神戸市中央区）の建築に着目し、美術館歩きの楽しさを探ってみた。

（神戸新聞東京支社編集部長　小西博美）

近代建築を象徴する建築家本館へといざなう道

かつて、国立西洋美術館の正門は、西側にあり、上野公園の噴水広場に面していた。そう聞いて、西側から入ってみる。いずれもロダンの彫刻である《考える人》を右に、《カレーの市民》を左に鑑賞して通りすぎ、《地獄の門》へまっすぐ続くラインが床に引かれている。そして、その線は途中で左に曲がり、本館へといざなう。

取材した4月、同館は、フランス北西部のブルターニュ地方をモチーフにした企画展「憧憬（しょうけい）の地ブルターニュ」を開催していた。企画展を見る時は、そちらに気を取られてあまり建物や敷地内の彫刻を気にする余裕はないが、今回は世界遺産となった建物や前庭、ホールなどをゆっくり散策してみたいと思う。

同館は1959年4月、フランス政府から返還された約370点の「松方コレクション」を核に、作品を保存し、広く公開する目的で設立された。その後、独自に作品を購入するなどして徐々に所蔵品が増えたため、地下に展示室を造りスペースを広げたという。

一方、2016年に本館と前庭を含む敷地全体が「ル・コルビュジエの建築作品ー近代建築運動への顕著な貢献」として、ユネスコの世界文化遺産に登録された。この際、世界遺産決議文には、ル・コルビュジエが思い描いた「前庭の顕著な普遍的価値が減じられている」と指摘されたという。それは、前庭の公園に面した南西側に植栽が施され、閉鎖的になっていたからだった。

前庭の改装工事をするなどリニューアル後の国立西洋美術館

ちょうど、前庭が防水工事をする時期にあたり、彫刻や植栽をいったん取り除く必要があった。同館は20年10月から22年4月までの約1年半休館。その間に、ル・コルビュジエの設計に沿うよう、再び西側に門をつくって植栽を減らし、彫刻もできる限り元の位置に戻すリニューアル工事を行った。

近代建築の基礎を築いたル・コルビュジエは、「近代建築の五つの要点」や「無限成長美術館」など革新的な建築の概念を提唱しているが、「建築的プロムナード」ということも言っている。プロムナードはフランス語で散策路の意。田中正之館長（60）は「建築的散策路というのが一番重要。散策して周囲を見ながら楽しんでほしい。それが、前庭のリニューアルでできるようになった」と話した。

19世紀ホールを無料公開長かった世界遺産への道

散策路に導かれ本館へ入る際にまず、目に入るのは「ピロティ」と呼ばれる空間だ。ピロティは、ル・コルビュジエの「近代建築の五つの要点」の一つで、柱で建物を支えてできた空間をいい、1階部分は何もなく、建物が宙に浮いているように見える。近代以前の重厚な建築とは違う軽やかな雰囲気で、田中館長は「20世紀建築の革命を体現しようとしているかのようだ」と表現する。

ル・コルビュジエが思い描いた散策路を示す床のライン

そのピロティを抜けて本館へ。常設展の起点となる「19世紀ホール」に入る。天井には三角形の明かり取りの窓があり、そこから差し込む光が、吹き抜け

「松方コレクション」やほかの収蔵品を紹介する展示室

ロダンの彫刻《カレーの市民》

ロダンの彫刻《考える人》

の部屋を美しく照らす。むき出しの柱やはりも木目が鮮やかだ。

この部屋の名はル・コルビュジエの命名に由来する。部屋の奥にあるスロープを上っていくと、この部屋を取り囲むように配置された展示室に着く。これが、核となる部屋を中心に、コレクションの増加に従ってらせん状に部屋を増やしていくという、ル・コルビュジエの「無限成長美術館」の発想を表している。現在は、彫刻家ロダンの作品が展示されている。

上空から見た開館当時の全体像
©国立西洋美術館

「スロープであることが大事」というのは田中館長。階段だとどうしても足元が気になって下を向いてしまう。足を進めるにつれていろんな場面展開を見られるのがいいとか。以前は有料エリアだったこのホールは現在、無料開放されており、何度でも訪れることができる。

このような展開をする元となった世界遺産登録は、フランス、ベルギーなど7カ国、17資産で構成される。当初、国立西洋美術館はこの中に入っていなかったという。パリのル・コルビュジエ財団が世界遺産登録を目指しているのを知り、同館も準備を始めた。しかし、申請するには、重要文化財の指定も受けねばならず大変だったそうだが、台東区や地元商店会が全面的にバックアップしてくれた。4度目の正直で見事、世界遺産への登録が決定。3大陸をまたいでの一括登録は初めてだったという。

川重とパートナー契約 川崎造船所の初代社長が収集

松方コレクションは、神戸に設立された川崎造船所（現・川崎重工業）の初代社長だった松方幸次郎が1910年代後半から20年代にかけて、欧州の各地で収集した美術品だ。「日本人に本物の西洋文化を見せたい」と情熱をかけて購入した作品は約1万点にも及んだ。それらの多くは、太平洋戦争が終わるまでに散逸したり、焼失したりしたが、戦後フランスに敵国財産として没収された約400点のうち約370点が返還された。

そんな浅からぬ縁から、国立西洋美術館と川崎重工業は3月、オフィシャルパートナー契約を結んだ。共同で所蔵作品の無料観覧日を設けたり、絵画の調査研究を進めたりする。4月から第2日曜を常設展の無料開放日としている。田中館長は「今後も松方コレクションの調査を進めるとともに、全ての人に等しく美術作品を楽しむ機会を提供するという美術館の役割を果たしたい」と願う。

文化復興のシンボル 安藤忠雄がデザイン

美術館の建物を楽しむという意味では、昨年開館20年を迎えた、兵庫県立

阪神・淡路大震災後に文化復興の象徴として建設された兵庫県立美術館
神戸市中央区脇浜海岸通1

美術館もひけを取らない。同館は阪神・淡路大震災後の２００２年、神戸東部新都心（ＨＡＴ神戸）に、文化復興のシンボルとして建設された。安藤忠雄氏の設計で、延べ床面積約２万８千平方メートルの規模は、国内どころか世界的にも最大級だ。

震災後、安藤氏は既に美術館に隣接する西側の地域に、「水際広場」をつくるべく神戸市と計画を進めていた。美術館内には安藤氏の仕事を紹介する「Ａｎｄｏ　Ｇａｌｌｅｒｙ」が設けられており、美術館と水際広場のイメージ図のほか、「何年経っても復興への意志を途切れさせることのないように」と集められた、倒壊した高速道路の写真や、燃える建物のスケッチなども収められている。

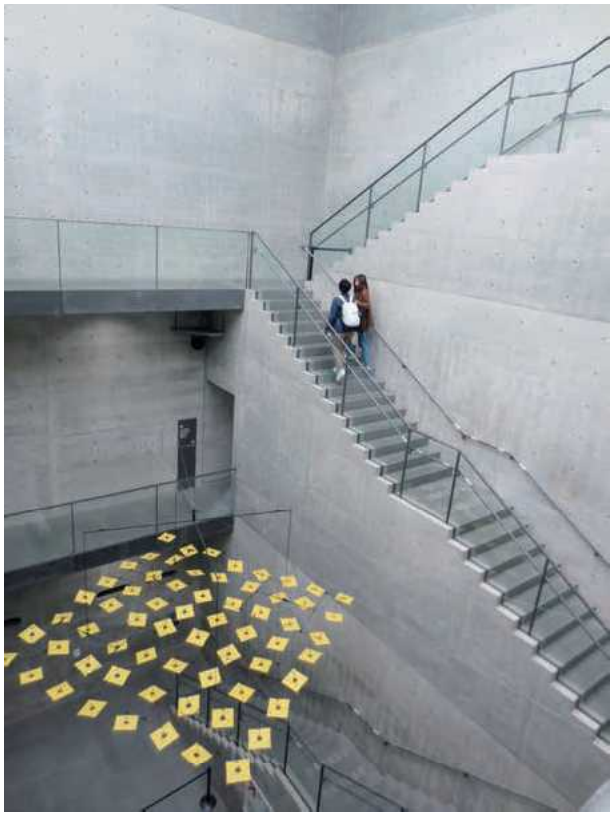
館内ではもちろん、企画展や常設展を展開しているが、建物だけを見ていても楽しい。例えば、地下１階の駐車場、１階エントランスホールと２階の屋外スペースを結ぶ巻き貝のような「円形テラス」は美術館のシンボル的存在だ。吹き抜けの階段ホールは壮大で、新宮晋氏の作品《星の海》のオブジェが涼しげに浮かんでいる。

海に向かって開かれたデッキには、安藤氏の作品である青りんごのオブジェが置かれており、撮影スポットになっている。青りんごは、安藤氏にとって青春の象徴なのだという。確かに、ギャラリーには小型の青りんごのオブジェとともに、「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。（略）」といったサミュエル・ウルマン氏の詩が紹介されている。安藤建築を支える根底にある思いが青りんごにこもっているのだ。ほかにも周辺には、セザールや元永定正氏の野外彫刻もたくさんあり、巡ってもおもしろい。

館長補佐兼課長の飯尾由貴子さん（57）は「展覧会だけで帰るのはもったいない。外を回ると安藤建築のスケールが分かり堪能できますよ」と建物巡りを勧めている。

〈参考文献〉国立西洋美術館編集・発行「ゼフュロス第84号」

美術館のシンボル的建築である円形テラス


新宮晋氏の作品が涼しげに浮かぶ階段ホール

青りんごのオブジェが映えるデッキ。訪れた人たちの写真スポットとなっている。